

月の花挽歌 ～7. 時の過ぎ行くままに～

7.時の過ぎ行くままに

7-1

横田がスペインの画家フランシスコ・デ・ゴヤに捧げるオマージュのつもりで描いた裸婦画の二作品は、今のところ画商の朝倉さえ知らされていなかった。

秘密裏に裸婦画を描いた横田の心情は当人にしか分からないが、完成後も越前和紙の里のI氏を除き黙して語らない訳を真紀にも打ち明けてくれなかった。

初々しさの内に裸婦を超えた何かがあると予感させられた作品を前にして、真紀の引き出しの中にあったストックの一端を共鳴させることで、自我以外との対話を享受することができただけでも、横田には感謝していた。

けれども、危なげな線上にいる二人の関係には、横田と真紀だからこそ発生しうる危険なリスクが介在した。

セックスで未知のオーガズムを得られたとしても、それが上質であればあるほど、心的要因でスローダウンさせられると、性の回復は人知の及ぶところではなくなってしまいうのが真紀独自の性癖だった。

越前から戻って以来、真紀は横田の同衾の誘いに乗ってこなくなった。

横田は自身の女性遍歴からでは手に負えない真紀の反応に動揺を隠しきれないでいた。

電話では埒が明かなかったので、帝国ホテルのバーへ誘ったり、『こはる』へ行く頻度を増したりして、あれこれと思い巡らせては策を弄したものの、一向に良くならないばかりか、オールドインペリアルバーでの待ち合わせもままならないまでになっていた。

「理由を言ってくれ」の一言が思わず口をついて出そうになるが、さすがに横田も、そこまで男を下げることはできなかった。

12月に入ってから、横田は足繁く『こはる』に来店するようになった。

朝倉と伴ってくることもあったが、一人で来ることがほとんどだったので、年末の書き入れ時の店としては、招かれざる客であったし、朝倉へのツケ払いになっていた。

横田の席にはヒデコがつくことが多かったので、「ママを呼んでくれないか」と催促されても、「ごめんなさい。もう少しお待ちください……」と座を取りなすしかなかった。

恋に憂き身をやつすテイの横田ではあったが、『こはる』のボックス席でひとり気を揉んでいたとしても、その風貌や存在感は芸術家然としていた。